# 参考文献


大竹市史　資料編第二巻　大竹市
ジャパン・クロニック　日本全史　講談社
石仏入門　日下部朝一郎著　株式会社隣人社
歴史とのふれあい　寺院と仏像　株式会社フジタ
仏教美術の基本　石田茂作著　東京美術
四国偏路八十八ヵ所　首藤一著　創元社

# 編集後記

初夏の日差しを受けて、私たち調査員一行は、石仏との出会いを求めて街角をゾロゾロ……、これに対し道行く人たちは時ならぬ行列にキョロキョロ……。このような中で、皆さんの温かい笑顔に支えられながら約一年間調査は続けられ、出会った石仏は六十五箇所にのぼりました。

石仏の定義はあまりにも広範で、顕彰碑・道標・家々のお墓も含まれますが、本書では、それぞれの地区で祀られ、多くの人々の信仰の対象となっている純粋なる石仏・石神を、本書「大竹市の文化財第一集石仏を訪ねて」に記載することにいたしました。

民間信仰として、石神仏が建立され始めるのは鎌倉・室町時代からといわれますが一般庶民の中に爆発的に建立されるようになるのは、江戸中期に入ってからで、市域の石神仏もその頃からのものであります。

市域は、十分な耕作面積をもたず、また広大な山間地域を有しながら、良好な林業生産地でもなく生活環境は厳しいものでありました。そんな時人々は、勢い石神仏に精神的におすがりする弱さをもっているものではないでしょうか。しかしこれが大きな支えとなって、現在の地域基盤を作り上げていると思います。

現在のように、移り変りの速い社会の流れの中で、今、わたしたちは心の文化を養うことが、一番大切な時期にきているのではないでしょうか。

本書が市民一人一人の手の中で温められ、活用されることを願っています。一家団欒のひとときの会話の一つとなり、また家族で、お友達同志で自然の中へ本書を片手に飛び出し石仏に手を合わせて見てください。きっと風雪に耐え歴史の流れを見ている石仏が何かを語りかけてくれるでしょう。そんな時、きっと心さわやかな気持ちになります。また造形的にも素晴らしい石仏にひかれ、美的感覚を養うことも出来ます。これが「御利益」といえるのではないでしょうか。

私たち大竹市歴史研究会は、発足以来十年、まだまだ成熟過程にある会ですが、製本化に当たり大竹市・大竹市教育委員会より、格別のご理解と機会をいただきましたことに対し、心から感謝申し上げます。

会員一同、喜びとともに大いなる責任を胸に総力を結集して調査、研究に取り組みました。しかし、決して十分とはいえず、各所に行き届かない個所があるかと存じます。今後も引き続きご指導いただければ幸せに存じます。

最後に、各地区の皆さんの笑顔と、温かいご指導に対し、紙面をもって心から感謝申しあげます。

大竹市歴史研究会　会長　畠中　軍龍

**調査者**

伊賀崎静子　池本　載幸　板倉　重宗　伊藤　貴子　井上　静子　岩脇　武生　江藤　哲枝
河内　貞子　河野　哲男　児玉サツキ　塩田　峰子　島崎　陽子　杉本　守正　瀬尾安留久
高林　宏明　田中　和子　徳本　藤吉　徳本　幸子　中本　智幸　長門　彰男　畠中　軍龍
畠中　洋介　花岡喜代子　藤恵　重子　福島　博　藤田　和江　藤本　覚　正木　久雄
正中　克磨　松並　松若　宮正　良生　村本富美子　望戸良太郎　望月　英範　守田　愛子
藪花　弥生　山重　杵子　横田　薫　依田　豊次

大竹市の文化財第一集　石仏を訪ねて

平成四年三月

発行　大竹市教育委員会
〒739-06　大竹市小方一丁目十一番一号
Tel（〇八二七五）七-七一一一（代）
内三三四

編集　大竹市歴史研究会

印刷　山陽印刷株式会社

「石仏を訪ねて」正誤表

| ページ | 箇　　所 | 誤 | 正 |
|---|---|---|---|
| ５ページ | 本文１２行目 | 右手 | 左手 |
| １０ページ | ２行目 | 大竹市本町＿＿＿ | 大竹市本町一丁目 |
| １２ページ | 本文　９行目 | 「幟」だ | 「幟」が |
| １３ページ | ４行目 | 舟型浮彫り立像 | 丸彫り坐像 |
| ３２ページ | 本文　４行目 | 三十三観音な | 三十三観音は |
| ３３ページ | 本文下段<br>２～３行目 | 全文削除 | |
| ６２ページ | 調査者名１行目下 | 江藤哲枝 | 江頭哲枝 |